

# 夏の炎天下 八戸対決激闘

## 高校野球青森大会決勝

### 光星、工大一のスタンドやベンチ 「素晴らしいゲーム」

弘前市はるか夢球場で27日に行われた第105回全国高校野球選手権青森大会の決勝は、八戸学院光星と八戸工大一が2年連続で激突する「八戸対決」に、勝負の行方は、決勝で初の延長タイブレークに持ち込まれる息詰まる展開となった。昨夏以降、両校の戦いは3戦とも1点

差の接戦で決着。聖地・甲子園へたった一枚の切符を巡り、夏の炎天下で繰り広げられたライバル同士の激闘に対し、控えの部員や父母、市民らで埋め尽くされたスタンド、ベンチは最後まで戦い抜いた両校サインをたたえる声や拍手であふれた。

夏の青森大会は新型コロナウイルスによる活動制限、日も熱い応援合戦が繰り返され、声出し応援がげられた。4年ぶりに復活。球場内は、試合は、序盤から両校の久しぶりに歓声に包まれ、先発投手が互いに譲らず、選手の活躍を後押ししてき三回までスコアボードに

は「0」。光星が先制した四回に工大一がすかさず同点に追い付くと、一塁側スタンドは一気に勢いづいた。「少しでも選手を勇気づけたい」。工大一野球部の応援団長を務めた3年竹中心優さん(青森市出身)の額には、ベンチ入りした同級生らのメッセージが書かれた赤い鉢巻き。駆け付けた生徒約410人と共に声をからした。

七回に光星が再び勝ち越すと、大いに沸いたのは三塁側スタンド。適時打を放った西尾太晴と同じ二塁手だった3年風穴大和(八戸市立市川中出)は「メンバ1から外れたのは悔しいけれど、やっぱりさすがが一「頼もしい後輩。いつも安心して見ていられる。甲子

緒のポジションで、近くで見たいから分かる。やつてくれると思っていた」と笑顔で浮かべた。13年ぶりの悲願を目指した工大一の歴代OBも接戦を見守った。2015年、3年時に準々決勝で涙をのんだ八戸市の会社員田子湧士さん(26)は「相手は好投手。コンバクトにつき、少ないチャンスを生かしてほしい」と、後輩たちの勝利を祈り続けた。

再び工大一が追い付き、手に汗握る攻防は延長タイブレークの末にゲームセット。最後に1点を守り抜いた光星ベンチからも大歓声。投手の3年館野弘輝(八戸市立東中出)は投手戦を制した2年の左腕2人へ「頼もしい後輩。いつも安心して見ていられる。甲子園でもいい投球が見たい」と期待を込めた。一方、昨夏に続き、1点差に泣いた工大一のスタンド。勝負が決まると、静まり返り、へたり込む人も。長谷地耀主将の父で父母会会長の孝さん(55)は「和田市は一文句の付けようがない素晴らしいゲームを見せてもらった」と声を詰まらせ、選手をたたえた。(林泰輔、岩淵修平)



試合後、互いの健闘をたたえ合う八戸学院光星と八戸工大一のサイン27日、弘前市はるか夢球場



優勝が決まり、喜びに沸く八戸学院光星のスタンド

1点差で敗れ、涙に暮れる八戸工大一の選手ら

#### 本紙が速報配布

八戸学院光星高が2年連続12度目の甲子園出場を決めたことを受け、デーリー東北新聞社は27日、八戸市内で速報を配布した。同社の従業員が市中心街などで700部を配った。三日町のさくら野百貨店八戸店付近では、市民らが次々と速報を受け取った。同市の会社員本和子さん(70)は「接戦でどちらが勝ってもおかしくない熱い展開だった。決勝が八戸の2校だったことがすごい。甲子園で光星には一個ずつ



八戸学院光星の甲子園出場を伝える速報に見入る市民。27日午後5時15分ごろ、八戸市。大事に試合してほしい」と話していた。(松橋瑠偉)